

まず「子どもの気持ちを聞く」こと。 もしも“いじめ”に出会ったら。

“いじめ”への対応について、マスコミにはしばしば学校や教育委員会の「不適切な対応」や、「隠蔽」が報じられます。

もちろん中には明らかに「不適切」と言わざるを得ない事例もあります。ただ一方で、現場からすれば「問題はそんなに単純ではないのに……」という戸惑いの声も少なくありません。

事実認定のしかた、“いじめ”を「した」側の子どもへの対応、さらには双方の保護者への接し方もとても難しい課題です。

もし“いじめ”に出会ったとき、まわりの大人はどうすれば良いのでしょうか。

ご自身のお嬢さんをいじめによる自殺で亡くされ、いじめをなくすためのNPO「ジェントルハートプロジェクト」を立ち上げて活動していらっしゃる小森美登里さんにお話をうかがいました。

“いじめ”をした子にどう向きあうか

竹村 最初に、小森さんがジェントルハートプロジェクトを立ち上げるきっかけとなったご自身のことや、いまどんな活動をしていらっしゃるのかについて、お話しただけませんかでしょうか。

小森 約20年前に、15歳だった一人娘の香澄をいじめ自殺で失いました。その経験がなければ、いま活動はやっていないですね。

ジェントルハートでは、学校から講演のご依頼をたくさんいただきます。小学校から高校まで、多いときは年間200校以上の学校への講演を毎年やっています。圧倒的に多いのは中学校なんですけれど。

それから講演だけではなくて、亡くなった子どもた



小森美登里さん

ちのメッセージを伝えるパネル展示会もしています。

竹村 藤沢にも何度か来ていただいたことがありますよね。それで、いじめをなくすためにはどうしたら良いか、小森さんがいちばん思っていることはどんなことでしょうか。

小森 “いじめ”って子どもの社会で起きている問題ですけれども、それは大人の間違っただけのメッセージがいじめを生み出していることもあると思います。

まず子どもに何かを求める前に、大人が“いじめ”とは何なのか、人権を尊重しながら幸せな人生を生きるって何なのかを考えることが、いじめ防止にとっても大切だと思います。

竹村 クラスで、はっきりいじめとはわからないけれど「あれ、何か様子がおかしいな？」とか、「どうもあの子が沈んでいる、何かあったのかな？」というときに、まず最初に先生はどんなふうにその子に接すれば良いと思いますか。

小森 元気がない子に直接聞くのではなくて、まずまわりの友達とか、ちょっと遠巻きに「何か気になることない？」って聞いてもらった方がいいかなって思います。

というのは、よく「大丈夫か？」って聞いたら本人が「大丈夫」っていうから何もなかった、ということがあるんですけども、元気がない子、いじめられているらしい子に「大丈夫？」って聞けば、「大丈夫です」って答えることも少なくないですよ。

ですから遠巻きから情報が入って、仮に「実は、ちょっといじめられているみたい」っていうようなことがいくつか出てくれば、いじめをしてしまう子どもへの指導もやりやすくなると思います。

“加害行為”をしている子どもは、素直に「いじめをしています」「反省しています」「ごめんなさい」ってなかなかありませんし、仮にいじめ行為を認めたとしても、相手に責任を押しつける場合もあります。

「あの子だってこういうことをした、だからいじめ

たんだよ」みたいにいじめることに理由付けをして自分を守る、というふうになってしまいがちです。やはり遠巻きから事実を確認して、加害行為をした子どもが言い逃れをできない環境を作る。

その上で、その加害者の子が抱えている「問題」に目をむける、という形での解決が良いのではないかと思います。

いじめを「する」子にも寄り添う

竹村 いじめをしてしまった子についても、その子の「抱えているもの」を先生たちは見てあげてほしい、と小森さんはおっしゃいますよね。

それはどんなところから、そのような考えにたどり着かれたのでしょうか。

小森 もし愛情をいっぱい受けて、幸せで充実した人生を送っている子どもならば、誰かを傷つけるということはなかなか考えにくい気がするんですね。

何か愛情不足とか、虐待をはじめ何か傷を負っている子どもが誰かを傷つけるという行為によってストレスを発散しているかもしれません（※注）。その子の背景に何かないだろうか、何か辛い問題を抱えていないだろうか、という視点を持った上での声かけが必要になると思います。

だから、簡単にいま目の前で起きている“行為”に対してだけ「やっちゃだめだよ」「それをしたら相手が嫌でしょ。自分だってされて嫌でしょ」っていう、先生が目触れた現象だけでの指導というのは、指導ではないと思います。

※注：ジェントルハートプロジェクトが行ったアンケートでは、いじめをしてしまった子どもの7割が自分も辛い思いをしていたり、かつていじめを受けていたことがある、と回答している。

竹村 藤沢でもいわゆる「支援教育」という考え方で、大人の目から見て「困った子」「問題のある子」と捉えるのではなく、なぜその子がそういうことをするか、その背景を見ていこう、という教育をめざしているつもりなのですが、今のお話をうかがっていて、とても通じるものがあると思いました。

小森 そう思います。私はそこが基本であって、いままでその部分がまったくないまま、“加害”者ではなく被害者への対応だけに偏ってしまっていたことが、いじめ問題が解決できない根本だと思っています。

いじめられている子の傷がこれ以上深まらないため

に、危険な場所から遠ざける、例えば不登校もOKだったり、保健室だったり、転校もあるし、フリースクールもある……って、これらはすべて被害者への対応です。

でも、「被害者がいちばん望んでいることは何なのか」に視点を置いてその目的を達成させるためには、“加害”者の背景や苦しみにも寄り添い、いま自分のやっている行為がいじめであって、相手の心を傷つけていたということに気づいてもらうことだと思います。

自分の傷に気づいたとき、自分の行為が相手を苦しめていた、傷つけていたということにつながると思うんですね。

「あなたも本当は辛かったんだね」なんて、自分の苦しみに寄り添ってもらう声をかけられたら、ちょっと素直な気持ちになれるかもしれないと思うんです。

竹村 お嬢さんを亡くされた小森さんが、「いじめた子たちの気持ちも聞いてあげてほしい」とおっしゃるまでには大変な葛藤もあったかと思います。

でも、それだけにとっても重い言葉だと思います。

小森 まあ、不思議と娘が亡くなった直後から、加害行為をしている子どもたちはどんなふうに育てられたんだろうかっていう疑問を持っていたんですね。

いろいろ耳にする中で、いじめていた子どもたちにも背景があったんだなって、わかってきましたね。

ただ怒りとは別なんですけど、やっぱり「しかたない」とは思えないですよ。うちの子に何て言うことをしてくれたんだっていう思いは今もありますし……

「一緒に寄り添う」なんて言いつつ、じゃあその言葉を、うちの子どもを死へ追い詰めたあの子どもたちに言えるかって言ったら、そこだけはちょっと横に置かせていただきたいというのが本心です。本音を言えば、許せない気持ちはありますね。

竹村 それは当然ですよ。

小森 だけど、なんでそれでも「“加害”者にも寄り添え」って言っているかっていうと、娘はいじめの辛い苦しみをいっぱい私に見せつけて逝きました。

その苦しみを次に活かすって言うか、その苦しみを私は絶対忘れてはいけなくて、次の命を守るバトンに娘から渡されたというふうに思えるから、その中で言えるようになった言葉ですね。

「私はここまでやったよ。あとはお父さんお母さん、任せたからね」そう言われて渡されたバトンの先に、試行錯誤しながら加害者の背景に寄り添うことが解決のための重要な部分だと思えるようになりました。

竹村 ごめんなさい、つらい話を。

大人の「ヒートアップ」

竹村 小森さんが、「被害にあった子がいちばん何を望んでいるのかをまず聞く、それがいちばん大事だ」っておっしゃったんですけれど、大人がヒートアップしてしまって子どもの声を聞かずに、「さあ謝罪をしろ」とか「加害者を処罰をしろ」とか、言うてしまうことがよくあるような気がするんです。

小森 そうですね。解決のしかたを間違えて問題が悪化したときには、大人のヒートアップを生むと思うんですね。

私が最初に言った「子どもの声を聞く」って言うのは、どう解決させるかという“方法”の部分と、あともっと根本のところとして、「私は学校に行きたい」「友だちに会いたい」「やりたい部活がある」、だから安全な教室・学校に戻してほしい、というその“望み”をかなえるために、「加害者に寄り添う」ことが大切だと思うんです。

そして加害者に寄り添いながら、解決のための道筋を作っていかなければならないのに、子どもが「お父さんお母さん、今ちょっとそれはやらないで」とか、「先生、これは内緒にしといて」と思っているときに、信頼関係が培われずに大人たちの意思だけで動き始めてしまうと、子どもは辛いんじゃないかと思いますね。たぶん「それはやめてよ！」って思っていることをやっちゃっていることが、たくさんあると思うんです。

だから本当に「子どもの思いを聞く」って言うのが何より大切で、大人の思い込みを正すことが重要だと思うんですね。

私は自分の娘を守れなかった反省がいっぱいあるんですけれど、「学校が危険だったら行かなければいいじゃないか」っていう方向に行ってしまったんです。

うちの場合は部活の中でいじめがあったので、「部活やめたっていいじゃない」とか、「あと一年間休んで仕切り直して、来年からまたやり直すことだってできるんだよ」なんていう話もしたわけですね。

でもそれは親が思う解決策であって、娘は行きたかったわけですね。学校に行きたい、安全で幸せな学校にもう一度戻りたい、そこが基本だと思います。

竹村 大人が思う「謝罪」「処罰」が、そのことにつながらないことになる可能性もあるわけですね。

子どもたちの多くは「処罰」を求めているんじゃないくて、「もう一回関係をつなぎ直して、楽しく安全に通える学校を作してほしい」というのがいちばんの願いなのに、どうも大人がヒートアップして間違ってしまうこともあるのかな……

小森 大人の怒りが増幅していく中で、子どもの怒りを増幅してしまう場合もあるかもしれないし、やっぱり大人が怒って言うのは根本的にあってはならない。

怒る気持ちは人間ですからあるんですけれども、まず大人が冷静になる、感情的にならないっていうことが何より大切だと思います。

竹村 もちろん自分のお子さんがつらい思いをさせられた、その時の親御さんのお怒りの気持ちは当然なのだけれど、ただ子どものためにはそこでやはり冷静にならないといけない、ということなのでしょう。

小森 そうですね。それもやはり「子どもを中心に」ということになるのですが、子どもを守るために今何がいちばん大切なのかということ、大人がその都度しっかり自分に言い聞かせて確認するという作業が大切だと思います。

「あ、自分はちょっと感情的になっているな」っていうときは、学校や家庭の連携の中でどちらかがセーブしあうとか、そういった立場の人が必要な場合もあると思います。

「傍観者になるな」と言うときに

竹村 いじめについて、「傍観者になるな」とまわりの子どもたちに求めるようなやり方もありますよね。これについてはどう思われますか。

小森 「傍観者」という言葉に、何か「不正義」を感じるんです。「お友達が傷ついているのだったら、それを積極的に守らなければいけない」、その部分は間違っていないと思うんです。

けれども、いじめがいま本当に多様化してきていて、私たち大人が子どもの頃に感じていたいじめに対する恐怖と、いまの子どもたちがいじめに対して感じている恐怖は、かなり違うんじゃないかと思うんです。

ネットで裸の写真を撮られてさらされたり、考えられないような犯罪行為も“いじめ”というふうに一括りにしてしまっている面もありますから。

そこを大人が一方的に「傍観者は加害者なんだ」、どんな恐怖があろうと、その先自分がどんな仕打ちを受けようと「正義を守らなければいけない」「友達を守ってあげなければいけない」というのは、あまりに強引だと思います。

友達を守ったあと自分が何をされるんだろうか、怖くて動くに動けない子どもたちの気持ちをまず知ること。それを知ったならば、まず恐怖を取り除いた上で「何かできることはないだろうか」と大人と子どもと一緒に考える時間を作ることが大切なんじゃないかと

思いますね。

友だちがいじめられているのに動かないのは傍観者と同じ、傍観者は加害者と同じ、という理屈はちょっと一方的すぎますよね。

竹村 実際に勇気を出していじめを止めに入った結果、逆にその子がいじめを受けるようになって、自殺してしまったケースもありますよね。

小森 ありますね。もう本当に、「やめろよ」というのはその場では言えるかもしれない、でもそのあと加害者たちから取り囲まれたときの恐怖、それはまず大人が想像しなければいけないところだと思いますね。

若い先生たちに伝えたいこと

竹村 いろいろな例を見ていくと、残念ながら学校や教育委員会が隠そうとしてしまったり、あるいは「隠蔽」という言葉を使わざるを得ないような対応をしたと批判されるケースもありますよね。

そのときに、やはり小森さんは学校や教育委員会にどんな対応をしてほしいと思われるのでしょうか。

小森 それ以前の対応を私は求めています。

何か問題が起きたときではなくて、最初の対応を間違えないで、起きてしまった問題を小さいうちに解決できる、そんな教育機関になってほしいと思います。

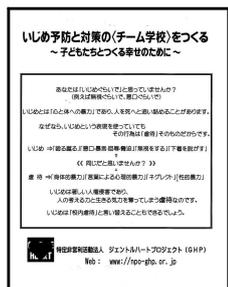
それでも万一起きてしまったときは、「再発防止」ということを大前提にして、考えてほしいと思います。

何で最初に“嘘”を言ってしまうか、何で“隠蔽”をしてしまうかっていうという、最初の対応をちゃんとやっていなかったからだと思う。

たとえばいじめに気づいていたけれども、どうして良いかわからないから見て見ぬ振りをしてしまうとか、良かれと思ってやった指導が間違っていたとか、問題が大きくなったときに表面化するわけで、自分の非を認めなければならない何かがあると、どうしても嘘をつくことになっちゃうんでしょうね。

竹村 小森さんがくださったパンフレットには「いじめ予防と対策の〈チーム学校〉をつくる」と書かれていますよね。

たとえば経験のない先生が自分ひとりで抱えてしまったり、失敗したときでも率直にまわりの先生に打ち明けられずに抱え込んで、傷をさらに広げてしまうこともあると思うのですけれど、やはり「ひとりで抱えずに皆で取り組んでいく」ことが大切なんですよね。



小森 まず発生した時点で、すぐみんなで共有することが大切だと思います。そしてこれから調査しようと思う問題も、みんなで共有すべきだと思うんです。

その中で、ひとりでは難しいけれどもチームの中で「そうか、それでやってみよう」というアイデアもあるかもしれない。ともかく子どものことを考えるのだったら、ひとりで抱えるのではなくチームで対応だと。

竹村 その他に、特に若い先生たちに小森さんからこれは触れておきたい、ということはありませんか。

小森 若い先生たちには、何かいじめの問題で対応しなければならぬ場面になったとき、まず自分が「こうしよう」と思っていることを、一度疑ってほしい。

「疑う」というのは、もし自分が子どもだとしたら、「それをされたとしたら、ちゃんと受け止められるだろうか」と一度想像してほしい。

もし自分が子どもで、この対応をされたらどうなんだろうということを、もう一回考えてから行動に起こしてほしいと思うんですね。

竹村 中心はまず子どもで、その子の気持ちをきちんと想像する、自分がもしその立場だったらどう思うだろう、それがスタート。

小森 そうですね。あともうひとつ、子どもが先生に相談するっていうのは、とても勇気を持って、やっと相談してきているって思ってもらいたいですね。

だから子どもが先生に相談してきたときには、もうずいぶん苦しんで、悩んで、勇気を持ってやっと相談してくれたんだ、っていう意識を持って話を受け止めてあげてほしいです。

本当に肝心なところで、やっと話してくれた内容が「重大事態」と思えなかった場合、「そんなの誰だって経験するよ」と言わないでほしい。

それはほんの入口の、やっとさわりの部分をしゃべっているだけの可能性があるんで、相談を受けたら、ともかくすべてを受け止めるって言うところ基本にしてほしいですね。疑わない。

竹村 大人は、自分のやろうとすることは疑う。だけど、子どもの思いは、疑うんじゃなくてまずきちんと受け止める。共感しながら話を聞く、っていうことですよね。

小森 「よく言ってくれたね」とって、相談してくれたことに対する評価の言葉をやっぱり伝えてほしいです。

竹村 それは“いじめ”だけじゃなくて、あらゆることの基本の基本ですよね。

今日はどうもありがとうございました。